

## セネカの哲人皇帝論

中西 捷渡 (広島大学)

本発表では、帝政ローマ初期のストア派哲学者ルキウス・アンナエウス・セネカの君主論をストア派的背景理論の中に位置づけることを試みる。

ルキウス・アンナエウス・セネカは、帝政ローマ初期に哲学者として活躍したほか、皇帝ネロの治世を支える政治家としても辣腕を振るうなど、多才な人物であった。幼いネロの教育係として登用された彼は、弁論術をはじめとした帝王学を受け、「ネロの5年間」と呼ばれる統治初期の善政を実現する立役者となった。このネロの治世初期にセネカは2篇の作品を著している。一つは、先帝クラウディウスの神格化を非難する『アポコロキュントーシス』という風刺短編であり、もう一つは、新帝ネロに「寛恕」の重要性を説く『寛恕について』である。前者はクラウディウス帝の事績を揶揄し筆誅を下すことを主眼とした風刺文学であり、後者は哲学的論考であるものの、理論的考察部分はほとんど失われており、現存箇所はネロに対する追従とも見えるほどの賛辞が大半を占めている。このような著作の特性から、これまでこの2作品を題材にセネカの思想を読み解こうという試みはあまり行われてこなかった。

しかし、この2作はセネカの政治哲学、とりわけ君主論を読み解く上で重要な著作である。というのも、まず『アポコロキュントーシス』は、アウグストゥスの先例に始まる皇帝の神格化という帝政における重要な儀礼の侮蔑的なパロディを通して、神格化されるに値する皇帝とはどのようなものかを論じた著作として読むことができるからである。そしてまた、『寛恕について』では、ネロに対する賛辞の中で神の代理人としての皇帝というイメージが様々に展開されるとともに、それが賢者の行為である「寛恕」の論考に結び付けられているからである。このことは、これら2作が哲人皇帝の理念を論じた著作として読めることを示唆している。

そこで本発表では、まず、アウグストゥスの範例としての活用、および、クラウディウス帝の事績の取り扱いの分析を通じて『アポコロキュントーシス』と『寛恕について』の繋がりを確立する。また、前段の分析に寛恕論の内容を加味することで哲人皇帝の理念を再構成する。次に、その哲人皇帝の理念が含むストア派的要素を指摘し、ストア派的世界像の中に位置づける。これにより、セネカがどのようにしてストア派の思想を応用し、哲人皇帝による統治という政治的理念を練り上げたのかを明らかにしたい。